

# ちよつとしり話

## ～ 月影 ～

「月影の至らぬ里はなけれども、眺むる人の心にぞすむ」法然上人の詠ですが、最近では大阪の上宮高校が甲子園で勝った時に、校歌として歌われる方が有名かも知れません。御存じのように、月は単体で光を放つことは出来ません。太陽系の惑星は、太陽の電磁波を受けてそれぞれが明るさを享受しているのです。地球は、自転することによって昼夜があり、生物の育成がなされています。社会生活をしていく中で、行わなければならない大切なことは、私たちは万能で無いことを知り、その上での行動が大事だと思われまふ。そこで、月影と言う事が大事になるのです。家庭で言うならば、夫婦がお互いに光を当てあい、お互いが光り輝くように努力をする。その結果、自ずから夫婦は相和す事になります。その光の恩恵を受けて育つのが、子どもであります。故に悪い子が育つはずはないのです。悪くなるということは、影もできないまさに暗黒の世界にいる、冷たい夫婦と言う事になっているのではないのでしょうか。子どもがおかしいと思う時、夫婦の状態を今一度見つめ直す必要があるのではないのでしょうか。こんな詠があります。「闇の夜に鳴かぬ鳥からすのこえの聲きけば生まれぬさきの父ぞこいしき」味わいのある詠だと思います。いかなる状況下におかれようとも、詠の最後にあるように、眺むる人の心にぞすむと言う事です。前にもお話しましたが、私たちは善悪の判断を完全にすることは出来ません。どうしたら良いのか、何にすればよいのか、『決疑鈔 第三卷』に「阿弥陀仏は南無阿弥陀仏とみ名を称える一声一声に答えて迷いの暗闇を破り光の中の人に生まれ替わらせる」とあります。即ち、念仏の生活が社会全体の絆となり、お互いを結びつけ相和す融合剤と言えるのです。家庭の平和から国々の平和へとつながって行くのです。果ては、やがて私たちが彼の国へ死して赴おもむく時、平和な極楽へと導いて下さるのです。

いっしょうしょうねんざいかいじよ ねんぶつしゅじょうせつしゅふしや  
一声称念罪皆除、念仏衆生攝取不捨

善入院油掛地藏尊